「続ける」と「頑張る」の間で

新井　宏

『まんじ』一七四号の「我が父・新井稔」を書いた時に、追記しようと思いながら忘れたことがある。

父が亡くなる直前の昭和六十二年十月、病床で私の妻に「来る人、来る人、頑張れ、頑張れ！と言う。……頑張れ、頑張れ！ は聞き飽きた」と言ったと言う。率直な父らしい発言として今でも時々話題にしている。

『頑張らない人生』とか『頑張らない生き方』と名付けられた本が多数出ている。タイトルを拾い読みしただけでも、薦めている著者の意図や人生観が分かる。鬱（ウツ）の人に「頑張れは禁句」だとか、「頑張れ」は日本語特有な意味合いを持つとも書いてある。

そこで、インターネットの「グーグル翻訳」に「頑張れ」と入れて、各国語に翻訳し、その言葉を再度日本語に訳してみた。本来なら「頑張れ」と入れれば、それに近い言葉が返されるはずであるが、三十ヶ国語ほど調べて見ても一例も該当例がない。「頑張れ」はスポーツ等の応援に関連する用語なので、異例の回答となったのかも知れないと考え、次に普通動詞の「頑張る」を入れてみる。

そうすると半数近くに「頑張って下さい」との回答が戻ってきた。その他の例は「最善を尽くす」である。

「最善を尽くす」との回答を示した言語は、おそらく「頑張る」に該当する単語を持たなかったためと考えると了解できる。

その差を国家とか文化との関連を調べて見たら面白そうである。ただし、「グーグル翻訳」に登録された言語は二百七十種もあり、「言語名」と「使用地域」を対照するだけでも数時間かかる。

そこで、西欧・東欧および東洋の代表的な国家の公用語を選び、日本語の「頑張れ」と「頑張る」を入力して各国語に翻訳して、その後、各国の翻訳語を日本語に再翻訳してみた結果を表1に示す。

表1「グーグル翻訳」に「頑張れ」と「頑張る」を入れて、
各国語に翻訳、その言葉を再度日本語に翻訳した結果

各国語	地域	「頑張れ」の再翻訳	「頑張る」の再翻訳
インドネシア語	東洋	良い仕事を続けて	頑張って下さい
マレー語	東洋	続く	頑張って下さい
ウイグル語	東洋	そのままにしておいて	頑張って下さい
ウルドー語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
クメール語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
サモア語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ジャワ語	東洋	平行	頑張って下さい
スワヒリ語	東洋	続く	頑張って下さい
タイ語	東洋	フォローし続けて下さい	頑張って下さい
ラオ語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
タミール語	東洋	そのままにしておいて	頑張って下さい
チベット語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ネパール語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ビルマ語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ヒンディー語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ベトナム語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
モンゴル語	東洋	続けて下さい	頑張って下さい
中国語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ダリー語	東洋	それを維持する	最善を尽くす
カザフ語	東洋	続く	最善を尽くす
エストニア語	東欧	良い仕事を続けて	頑張って下さい
クロアチア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
セルビア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ウクライナ語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ベラルーシ語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ロシア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
シレジア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ラトビア語	東欧	だから続けて	最善を尽くす
リトアニア語	東欧	すぐに	最善を尽くす
ギリシャ語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
スロバキア語	東欧	続けて	最善を尽くす
スロベニア語	東欧	続けて	最善を尽くす
チェコ語	東欧	ただ続けて下さい	最善を尽くす
ハンガリー語	東欧	続けて	最善を尽くす
フィンランド語	東欧	続けて	最善を尽くす
ブルガリア語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
ルーマニア語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
英語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
独語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
仏語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
イタリア語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
スペイン語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ポルトガル語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ベルギー語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
オランダ語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
デンマーク語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ノルウェイ語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
スウェーデン語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
タタール語	中東	保存する	最善を尽くす
トルクメン語	中東	保つ	最善を尽くす
ヘブライ語	中東	それを維持する	最善を尽くす
ペルシャ語	中東	続ける	最善を尽くす
ベンガル語	中東	それを保って下さい	最善を尽くす

「頑張る」の例をみると、任意に選んだ東洋の代表例では2件の例外（ダリー語、カザフ語）を除き全て「頑張って下さい」を返してきたのに、西欧の代表国では全て、「最善を尽くす」を返してきている。ダリー語はアフガニスタンやイスラムの公用語でアフガン・ペルシャ語と呼ばれ、カザフ語とも近い関係がある。

東欧・中東では両者が入り交じっている。どうやら、西欧諸国では「頑張る」に類似する単語がなく、東洋には「頑張る」に類似する単語が存在するというのが、回答のようである。

次に日本の「頑張る」と言う単語について調べてみる。まず漢和辞典をみると「頑」は「偏屈、拗けている、欲が深い、愚か、悪者」の意味を持ち、「張る」は「拡げる、強くする、盛んにする」の意味を持つとある。いずれにしても決して良い意味の語彙ではない。

次ぎに「漢和辞典」で熟語「頑張」を引いてみるが該

当項目がない。仕方がないので「古語辞典」を引くがそこにも該当項目がない。日本においても、江戸時代までは西欧と同様に「頑張る」という単語がなかったかも知れない状況なのである。言語学専攻でもないのに、踏み込み過ぎているが、取りあえず「試論」として掲げておく。

ちょっと脇道に入るが、人間の脳は左の言語脳と右の音楽脳に分かれていて、虫の音や鳥のさえずりを、母音系言語を話す日本人は左脳で言葉のように聞くのに対して、子音系言語を話す西洋人は右脳で雑音として聞くため無視して聞こえないのだと言う。あるいは「頑張る」という言葉にも西洋人には「虫の音」のように聞き取れない事でもあるのかも知れない。

さて、第1表によれば、「頑張る」という単語に「頑張って下さい」と同じ意味の単語を返す場合の他に「最善を尽くす」と異なった語で返す場合があるにもかかわらず、「頑張れ」という単語に各国語が返してきたのは「維持する、続ける」という共通の言葉である。したがって、凡世界レベルで言えば、「頑張る」は「続ける」の同意語と見なせるであろう。

それにしても「頑張る」と「続ける」では類似項もあるが、かなり異なる。極端に言えば「正反対」のイメージさえある。

そんな事で思うのは、私の一生を顧みると意外に「続けている」ことが多いのである。「続ける」が「頑張る」であるなら、我が人生まるで「頑張り屋」の優等生とでも言えそうである。しかし「継続は力なり」を「戦陣訓」だと思っていたので、「頑張る」と言う言葉と共に「続ける」にも抵抗感があった。「頑張る」の漢字語源を知ると、「続ける」には異なる理解がありそうである。

「続ける」なら自発的な「ゆっくり」という形容詞を付けて「ゆっくり続ける」としても調和するが、「頑張れ」には他者から強制されるイメージが強く、どこかで戦陣訓の「生きて虜囚の辱を受けず」を連想してしまう。

ところが「継続は力なり」を「戦陣訓」に確認してみると見つからない。「戦陣訓」にあるのは「信は力なり」であり、筆者の記憶はかなりいい加減であった。そこで「継続は力なり」の出典を調べて見る。

諸説あるらしいが、浄土宗の宗教家・住岡夜晃氏の『讃嘆の詩』で、

青年よ強くなれ、牛のごとく、象のごとく、強くなれ

真に強いとは、一道を生きぬくことである、性格の弱さを悲しむなかれ、性格の強さ必ずしも誇るに足らず、

「念願は人格を決定す　継続は力なり」とある。

「真に強いとは、生き抜くことであり、性格の強さは誇るにたりない」と「牛歩」のようなゆっくりした人生を薦めている。戦陣訓の「生きて虜囚の辱を受けず」とは正反対なのである。

人生も最終コースに入って見ると、「続ける」ことに拘っていた自分について、他者から「よく頑張った」といわれるかも知れないが自らは、「そんなことない」と感じるのである。

例えば、前号に書いたように『まんじ』に連続して百号二十五年間も無欠稿で連続掲載した事など、その例として良いかも知れない。また平成四年に「史遊会」に入会し、令和元年まで二十七年間も主力編集者を勤めたこともその部類であり、自分の意識としてはむしろ「牛歩」なのである。

そもそも、大学卒業時に日本金属工業に入社した時には、まさか定年まで勤めるとは思っても居なかったのに、終わってみれば、四十三年間も勤めあげていた。途中に、魅力的な転職の機会が無かったわけでもないので、性格弱さがあったからであろうか。

他にも、万歩計との格闘もある。平成五年十一月に始め、現在もなお続けているので、これも三十二年目である。その間詳細な記録を保存しているので、図1に紹介する。

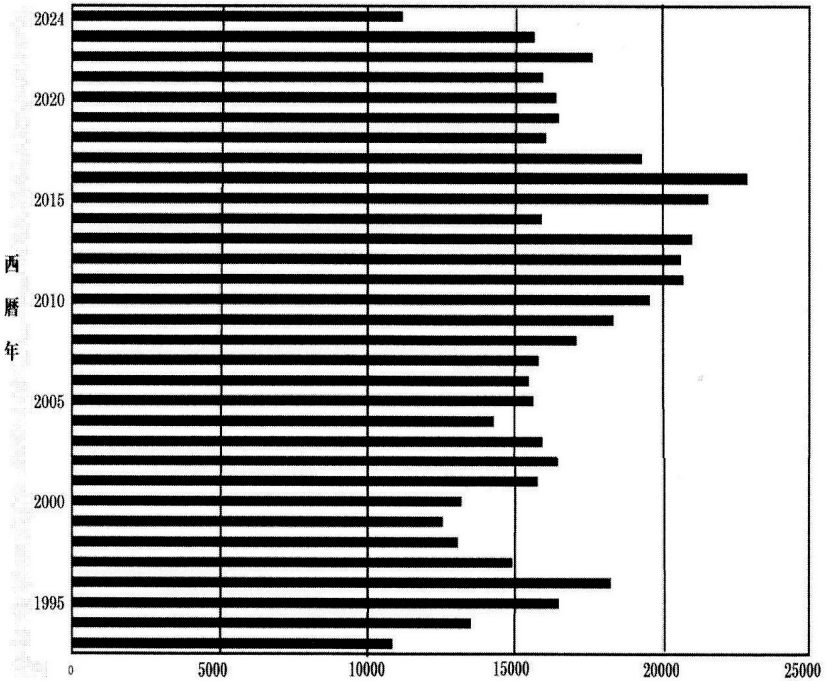

図1　年別万歩計平均歩数実績(歩／日)

この「万歩計」のスタートは会社で健康増進のために

「万歩」運動を始めたことであるが、職場の長として、格好を付けていたが、当初はやっと「一万歩」であったのが二年後の平成七年には「一万五千歩」を越え、更には平成二十三年には「二万歩」、そして平成二十八年には「二万三千歩を達成し、以降は下り坂ながら、昨年の令和五年までは「一万五千歩」を維持していた。しかし今年に入って一気に体力が落ち、「万歩」維持がやっとである。それでも毎日歩き続けている。

他人から見れば馬鹿げた行為に見えるであろうが、いまや「健康対策」を越えて、「お念仏」か「おまじない」の境遇なのである。もしここで「万歩」を放念したら、血糖値や高血圧対策も「薬」に頼るしかなく、一気に健康崩壊となるような恐怖感さえある。

同様なことが、手を広げた「金属考古学」や「古代計量史」の研究にもある。今も論文誌『鉄と鋼』を発行する日本鉄鋼協会会員であり、六十二年間も続けて在籍しているのは一万人の学会員の内でもごく少数であろう。もっとも現役時代は金属物理学の研究であり、卒業後は同会の「社会鉄鋼部会」で「たたら製鉄」など「金属物理学」の分野を研究していて「二刀流」と言えないこともない。

ついでながら、『まんじ』一六八号に紹介した刀匠久保善博氏のことについても追記しておきたいことがある。

久保氏は『鉄と鋼』に対し十年間にわたって論文再審査請求を続けていた。一言で言えば、十年間にわたり、「たたら製鉄」に関する論文を『鉄と鋼』に投稿し続けて来たが毎回「不採用」の判定で、久保氏は鉄鋼協会の「考古学部会」の座長を務める板谷宏氏に何とか成らないかと相談したが、動いてもらえなかった。ただ、その時に板谷氏から「新井先生に相談してみたら」と助言されたという。

久保氏は板谷氏も動いてくれなかったことで、いったんは諦めたが、二年後になって意を決し、メールで私の助力を求めてきた。

その後の経過は、一六八号に交換メールを公開することで示したが、最初は「査読者意見」に対する筆者の痛烈な反論を書いた。その内容を久保氏の論文に追記しても良いし、場合によっては、筆者の記名入りの見解書をそのまま添付しても良いと伝えた。その見解書には、もし再審査を行わない場合には、「鉄鋼協会」の不名誉になるだろうとの「脅かし」まで付けておいた。

久保氏は自らの論文を数点補強したが、それでも不安で筆者の見解書を直接添付する「非常手段」を選んだ。

その効果はてき面であった。半月ほどすると「鉄鋼協会」から新投稿としてなら審査に応じるとの返事が入った。そして「旧稿」とほぼ同じ内容の「新稿」が無事に合格し掲載されたのである。

丁度その頃、久保氏は「令和の名刀・名工展」の作刀の部で「大賞」に輝き、次世代の「人間国宝」の最有力

者にもノミネートされた。二重の栄誉であり喜びであった。ここまでは既に一六八号にその詳細を紹介している。

ところが、つい一ヶ月ほど前に、久保氏の論文「たたら製鉄の銑生成におよぼす砂鉄中 TiO_2 濃度の影響」が『鉄と鋼』の「俵論文賞」に選定されたのである。日本の鉄鋼業発展の最大の功労者である東大教授俵国一先生を記念する「俵論文賞」は、鉄鋼協会でも第一等の論文賞である。しかも数名の共著論文ではなく久保氏の単著論文であり、論文の評価が如何に高かったか想像できるであろう。その論文の謝辞の欄に私の名前が載っている。私まで受賞したくらいに嬉しくなった。

久保氏にはお祝いのメールにつけて、大学教授でもなかなか受賞できない「俵論文賞」を受賞したからには、ぜひ住まいに近い広島大学とか岡山大学で客員教授にでもなるようにと薦めておいた。

「鉄鋼協会」ほどではないが、会員歴を二十五年以上続けている学会に、日本考古学会、情報考古学会、計量史学会、たたら研究会、朝鮮学会、古代学研究会、古代史の海などがある。

また「続ける」とは若干異なるかも知れないが、私にはデータを集め続ける習性がある。格好良くいえば、データベースを数多く作っているのである。いずれも研究の基礎段階に関連資料を徹底的に集めるので、その後、惰性もあって関連資料を集め続けている内に、ちょっとした研究所並みのデータベースに成長したものもある。代表的なケースを示すと次のようなものがある。

① 古代製鉄関係の鉱石、滓、遺物、炉材等の成分データベース
② 古代非鉄金属関係のデータベース
③ 青銅器関係の鉛同位体比データベース
④ 世界各地の鉄、貴金属、非金属の価格、穀物価との比較
⑤ 炭素十四年代データベース
⑥ 古代遺跡や古墳図面や計測値のデータベース
⑦ 年輪年代資料データベース
⑧ 金属比価統計

これらはいずれも筆者のホームページに公開しているが、時折内容についての質問が入る。

この中で密かに誇っているのが、④の世界各地の古代金属価の穀物価との比較である。意外に一覧性のある形で示されている例が見つからない。データの載っていそうな論文のコピーを随分集めてあるが、整理が遅々として進まない。その一部は学会にも報告し、暫定的な収拾結果は筆者のホームページに示しているが、対象の地域や時期が異なっても、比価のバラツキは数倍以内に納まっている場合が非常に多いのである。

ついでながら、筆者のホームページには、『まんじ』七五号から最新号（一七四号）までを完全収録している。

住まいの関係でまんじ定例合評会に出席されていない「明治時代の著作者渋江保の足跡を訪ねて」等の著者山本勉氏や「人事部長首切り姫」等の著者匠克仁氏作品は、掲載の冒頭作品から順番に読むと、読み終わる前に合評会が来てしまうことも多かったので、最近は「斜め読み」であるが巻末から逆に読んでいる。二氏の作品には『まんじ』掲載としては異色なものが多いが、異色なだけに示唆されることも多い。

また「史遊会」の『史遊会通信』についても一七一号から二七〇号までを私のホーム頁に掲載している。

私の人生を顧みると、進学、就職、結婚、趣味、老後の人生の岐路に際して、「全て」を自分で決めている。いま思うと「小さな事」でも例外がないようなのである。親が構ってくれなかった所為かもしれないが、よほど「他人の干渉」を嫌っていたのかも知れない。

だから自分できめた人生なので長く「続く」ことが多いのであろう。それが「継続は力なり」につながる。「頑張れ、頑張れ」に不満がある訳でもないが、どこかに馴染めないのは、そんなことかも知れない。

『まんじ』もいま岐路に差し掛かっている。長い時間をかけて、先輩達が築き上げてきた同人誌であり、私の人生でも最も長くお世話になっていながら、一度も「幹事役」を勤めた事が無い。それは、『まんじ』が自分の会ではなく、「協和銀行」同窓誌であり、そこに参加させて頂いているとの意識からである。だからこれからも「続けよう」とも「頑張ろう」とも言うまい。これからも自然体で私の役割を「続ける」ことに努力したい。

ここまで書いて、蛇足を付け加えたい。

「頑張る」は人生の成長期の用語、「続ける」は人生の終息期の用語だと思う。

もう三十年以上まえになるが、朝日新聞で、古典中国文学者、九州大学名誉教授、日本学士院会員の目加田誠先生のエッセイを読んだ。大意は九十歳近くなった目加田先生が心がけているのは、先端的な研究は若い研究者に任せ、膨大な資料をこつこつ読んで、その中から何か若い研究者へ伝える資料を見出すのが老齢の研究者としての役割だと述べていたことである。

どこかで自分もそう有りたいと思っていたことが、今回のエッセイに繋がっていると思う。先生は明治三十七年生まれで、平成六年九十歳で亡くなられた。

イェイツ詩集を読む

岩上和道

岩波文庫版の「対訳　イェイツ詩集」（高松雄一編）の表紙にはこう書いてある。

「イェイツ（1865-1939）は、アングロ・アイリッシュのプロテスタントとしてアイルランド文芸復興に携わった特異な詩人であり劇作家であった。変貌し続けたその詩は、芸術至上主義、象徴主義、オカルティズム、アイルランドの民族意識と神話伝説等々の複合体とでも言うほかはない。」

このノーベル文学賞作家（1923年に受賞）でもある、アイルランドの詩人W.B.イェイツの詩は、何人かの世界的に有名な作家、アーティストに大きな影響を与えている。そこで、本稿「イェイツ詩集を読む」では、現代に至るまでも、こうした著名な芸術家を魅了するイェイツという詩人のことを少し考えてみたいと思う。W.B.イェイツ、正式な名前はWilliam Butler Yeatsという。元々アイルランドはカソリックの国なのだが、彼の一家は、イングランドから来た家族の末裔で、そのため、彼自身も宗教としてはプロテスタントであった。しかし、イェイツはアイルランドの民族意識の高揚を支援し、またその文芸復興にも尽力した。ここでは、イェイツの評伝を書こうというのではないので、その生涯を詳述するつもりはないが、（本当はその生涯もなかなか面白そうなのだが、それはまたの機会に）まずは彼の詩が大きく影を落とす三つの作品を取り上げたい。

その1　「動揺」"Vacillation"（1932年作）と大江健三郎

僕は最近「銀鼠髪のオデュッセウス」（コールサック